

堀江保蔵教授に感謝して

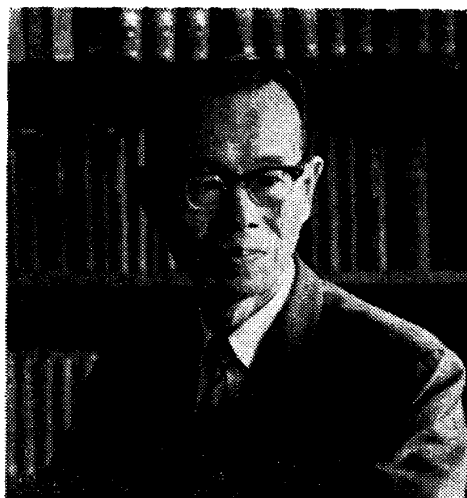
本年3月末をもって、京都大学教授堀江保蔵先生が定年退官されることとなった。

堀江教授は1904年舞鶴市に生まれ、1928年京都帝国大学経済学部卒業、大学院学生をへて、1930年経済学部講師、1934年同学部助教授、1945年同学部教授になられ、今日に至るまで終始、京都大学に勤務。その間1954～56年は経済学部長、1963～66年は付属図書館長をつとめられた。その公表された業績としては、著書18冊、邦文論文約150編、英文論文20編、さらに編集された辞典史料は9種類にのぼり、日本経済史研究の指導的役割をはたされた。わたくしの経験を記して恐縮であるが、1961年東南アジア研究状況の調査のためアメリカを旅行したとき、多くのアメリカ人学者の机上に堀江教授の著書がおかれているのを見た。「日本の近代化を知るためには堀江教授の著書が最もすぐれている」と激賞した何人かの研究者に会って、わたくしはたいそう嬉しかった。

堀江教授の経済史研究にかんする成果や、京都大学における教育・運営についての貢献は、まことに大きいといわねばならないが、わたくしごときはそれを述べる資格はない。

ここでは、堀江教授の東南アジア研究センターにたいしての、終始かわらない努力について、記したい。

1959年に京都大学に人文・社会科学関係の教官でもって、東南アジア研究会がはじめて組織されたとき、経済学部からは堀江教授が参加された。もともと、日本経済史のうち、とくにわが国の近代化の研究について第一人者である教授は、東南アジアの近代化について強い関心をよせられ、たとえば1961年1月には、東南アジア研究会の研究例会で「近代化の諸問題」について報告された。また京都大学としての東南アジア研究の必要を痛感されたために、積極的にこの組織の推進に努力された。1962年に京都大学東南アジア研究センター研究計画準備委員会が奥田東農学部長を委員長として設けられたとき、委員として、研究計画の組織と推進とに努力され、翌1963年1月、学内措置としての東南アジア研究センターの設置にともない、総務部



主任になられ、さらに1965年4月センターの官制化のもとでも、総務部主任をつとめ、今日におよばれた。1963年12月から翌年2月にかけて、東南アジア研究センター所長の奥田東農学部長が総長に就任され、人文科学研究所岩村忍教授が所長に併任せられるまでの期間、またその後、岩村所長の再三の外国出張のおり、所長事務取扱の任務をはたされた。

教授は、経済史研究のほか、大学内外の多くの教育・研究上の任務につくされ、東南アジア研究の現地調査がスタートした1963年以降は、とくに多忙をきわめられた。そのため、とうとう、東南アジアの現地調査をなされなかったことは残念である。しかし、わたくしした後進のものは、教授の日本経済史の研究から東南アジアの今日の問題について、いろいろ直接間接にお教をうけるところが多かった。たとえば、「明治のはじめ20年間近代日本の基礎がきずかれたが、それが自力で進められ、鉄道建設と士族就産資金調達のため2種類の国債をロンドンで起こした以外、この間外資はまったく導入されなかった」という教授の指摘は、東南アジアの近代化をとりあつかうわたくしたちにとって、ひじょうによい示唆になる。

教授は「東南アジア研究センターの、縁の下の力もちになりたい」と、よくいわれた。なかなか厄介なこの仕事を、せいいっぱい尽していただいた。いま、京大を去られるこの機会にあたって、厚く御礼を申しあげる。

教授は、これから京都産業大学でさらに教育と研究とに従事されるとのことであるが、東南アジア研究センターは open system を基本方針としているから、こんご引きつづき積極的にセンターの研究活動に御参加くださることをお願いしたい。 (本岡 武)